

「こどものもり」プロジェクト

～岐阜市民病院 小児病棟 壁画制作の取り組み～

"KODOMO-no-MORI", Mural painting of the pediatric ward at Gifu Municipal Hospital

小川 直茂
OGAWA Naoshige

奥村 和則
OKUMURA Kazunori

坂本 牧葉
SAKAMOTO Makiba

Abstract

In recent medical services, attempts have been made to improve security and comfort in consideration of the psychological aspect of patients and families. "Hospital art" which arrange art in the medical space is one of its typical activities. Engaging in the design of these activities is very meaningful. Since 2015, we have been working on "KODOMO-no-MORI" Project with Gifu Municipal Hospital. In that project, we produced mural paintings in the pediatric ward. In this paper, we report on the background and deliverables of the project. And we consider social and educational significance of this project.

Keywords：産学連携、ホスピタルアート

1. はじめに

近年、医療サービスに対する人々の関心が高まりを見せる中で、単に医療行為の技術的な追求のみならず、治療を受ける患者や家族の心理面を考慮して医療環境における安心感や快適性を創出するための様々な試みが行われている。医療空間にアートを導入し、芸術作品が鑑賞者にもたらすポジティブな効果を積極的に活用する「ホスピタルアート」はその代表的な活動の一つであり、医療環境の将来的改善に向けたデザイン支援の最たる例として位置づけることができる。

筆者らが所属する岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科ヴィジュアル専修では、平成 27 年度より岐阜市民病院との産学連携事業として「こどものもり～岐阜市民病院小児病棟 リノベーションプロジェクト」に取り組んでいる。そのプロジェクトの中核に位置づけられるのが小児病棟内に描かれる壁画の制作である。本稿では、岐阜地域におけるホスピタルアートの実践事例として、連携事業の経緯や制作プロセス、成果物など一連の内容の報告を行い、本連携事業の社会的意義、および高等教育機関としての教育的意義の両面から考察を行う。

2. 連携事業概要

岐阜市民病院は岐阜市によって運営される総合病院で、その施設規模は診療科 22 科・病床 609 床（一般 559 床、精神 50 床）と岐阜県下でも有数を誇る。同病院では、厚

生労働省が推進する病院病棟の機能見直しの気運を受けて、既設の中央診療棟 7 階病棟を 15 歳未満の小児を対象とした小児専門病棟として使用する方針を定め、2015 年 8 月より実際に運用を開始した。その際に課題として浮かび上がってきたのが、施設の内装等に起因する病棟空間の無味乾燥な雰囲気であった。このような病棟空間のイメージを改善することで、入院や診療で訪れる小児患者の不安を和らげ、病棟での生活に少しでも楽しさを感じてもらえるような空間を実現したいとの意見が病院関係者から出された。

このような経緯を経て小児病棟にふさわしい病棟の内装デザインを検討するにあたり、視覚表現に関する専門的な知識と技術を有する機関との協力体制を構築したいとの意向が同病院において強まったことから、平成 27 年 10 月に筆者らの所属学科に対して産学連携事業実施に関する打診があった。それを受けて学科内で具体的な連携方法に関する検討を行い、実施体制に関する目処がついたことから、連携事業を実施する方向で合意した。

その後、10 月 22 日に筆者らと病院関係者らのプロジェクトコアメンバーによるミーティングを開催した。このミーティングにおいて、連携事業の大枠を以下のとおり決定した。

- (1) 病棟内の複数のエリアに壁画を描き、小児病棟にふさわしい病棟空間のイメージ構築へと繋げる。

- (2) 病棟内の壁画を制作するにあたっての統一コンセプトを「こどものもり」と定める。小児病棟の空間全体を「様々な動物の住まう森」と見立て、エレベーターホール／通路空間／ナースステーションなど各エリアの空間的特徴を反映させつつ、病棟全体として統一感のある空間イメージを演出する。森の自然や動物たちの存在と触れ合うことで、小児患者が安らぎや喜びを感じてもらえるような表現を目指す。
- (3) 壁画のデザイン考案・制作は学科在籍の学生が中心となってい、教員は学生の制作指導を務める。
- (4) 複数年度にわたる連携事業計画を策定し、段階的に壁画の描画エリアを拡張させる。部分的に小児患者が壁画制作に参加できる体制を構築するなど、「こどものもり」ができあがっていくプロセス自体を病院内のイベントとして活用できるような方法についても検討する。
- (5) 壁画制作以外の内装デザイン（サイン計画／インテリアなど）についても「こどものもり」のコンセプトを元に改善を加えるべく検討を行う。

プロジェクトメンバー内でのイメージ共有を図るために描かれたコンセプトスケッチを（図1）に示す。なお、プロジェクト初年度となる平成27年度の壁画制作エリアとしては、病棟のエントランスにあたるエレベーターホールの壁面約30㎡を設定した。



図1. 「こどものもり」コンセプトスケッチ

3. 壁画制作

ミーティングの内容を受け、生活デザイン学科ヴィジュアル専修の1年生にプロジェクトへの参加を呼びかけたところ、10名の参加希望があった。この10名の学生メンバ

ーを交えて、平成28年2月1日に病棟見学および病院関係者を交えたブリーフィングを実施した（図2）。ブリーフィングでは壁画のデザイン案を考える上で必要となる各種情報を共有し、また描画エリアの空間構成やスケール感を確認した。ブリーフィング終了後、筆者らと学生の間で第1回スタッフミーティングを開催した。病棟を訪れる小児患者を出迎えるエントランスのイメージを表現するために「2本の大木を門になぞらえ、その周囲に多数の動物を配置した壁画」という方針を定め、それらのキャラクターデザイン案を学生が考案することとなった。



図2. 病棟見学の様子

2月16日に第2回スタッフミーティングを実施し、前回課題として提示したキャラクターデザイン案を各学生が持ち寄った。提案されたキャラクターの総計は約50体である。それらのキャラクターをスキャンしてデータ化し、教員が作成した背景画に配置しながら、キャラクターの描画数やレイアウト、キャラクターデザインのテイスト統一など描画内容についての詳細な検討を行った（図3、図4）。



図3. 第2回スタッフミーティングの様子

「こどものもり」プロジェクト

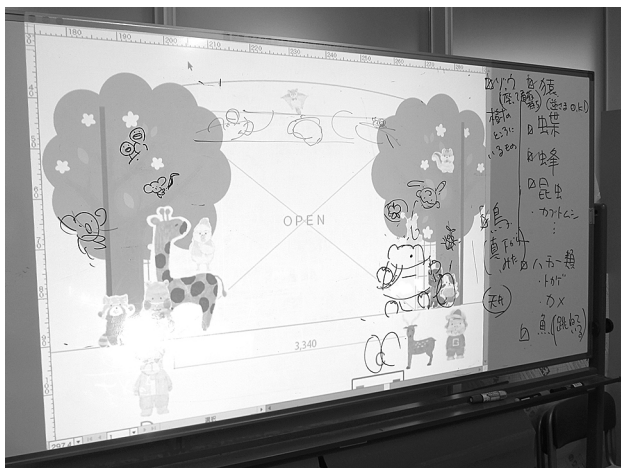


図4. キャラクターのレイアウト検討作業の様子

2月25日に病院関係者を交えて第3回スタッフミーティングを行った。実寸大で投影されたプロジェクターの映像、スタディ模型等を元に壁画デザイン案の最終的な確認と調整が行われた（図5、図6）。



図5. 第3回スタッフミーティングの様子

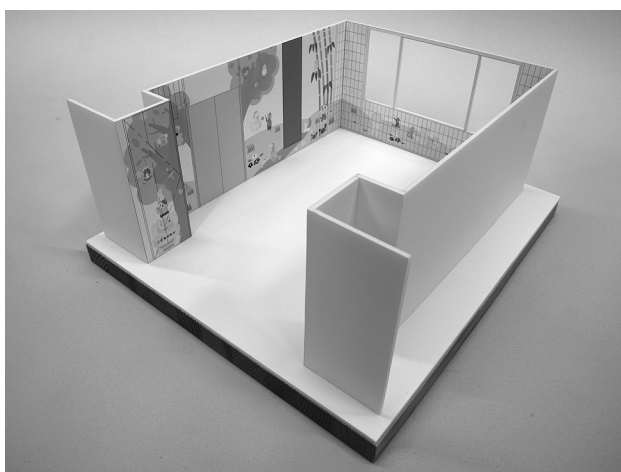


図6. スタディ模型

翌月の3月8日から10日に病棟内で壁画の下描き作業に着手し、同月24日から30日に塗りの作業を行った（図7、図8）。25日と26日には病棟に入院する小児患者が制作に参加し、和やかな雰囲気の中で作業が進められた。

壁画の描画にあたっては、壁面に加えて天井面にも部分的に描画を施し、森の中の立体的な空間イメージを感じられるような表現となるように心がけた。



図7. 下描き作業の様子



図8. 塗りの作業の様子

こうした経緯を経て完成したエレベーターホールの壁画を（図9～12）に示す。



図 9. 完成した壁画（南面）



図 10. 完成した壁画（南面、西面）

「こどものもり」プロジェクト



図 11. 完成した壁画（北面）



図 12. 完成した壁画（東面）

本プロジェクトの内容は、ぎふチャン（3月8日 報道番組「Station！」放送）、岐阜新聞（3月29日朝刊掲載）、中日新聞（4月1日朝刊掲載）、読売新聞（4月8日朝刊掲載）など複数のメディアで取り上げられ、社会的意義の大きい連携事業として注目を集めた。

4. 考察

本活動の一連の内容について考察を行う。

本稿の冒頭で述べたとおり、ホスピタルアートの活動意義については既に社会においてその認識が浸透しつつあり、近年新たに建設された病院施設ではこうした心理的側面への対応を入念に考慮して設計された事例も多く存在する。しかし既設の病院施設に関しては、そうした対応が十分に実施できていないケースも少なくない。その理由としては施設改修にともなうコストの問題や、施設を運営する医療関係者の意識など複数の要因が関係していると推察されるが、今後超高齢社会の進行にともなって医療機関の重要性が増すことが確実視される状況において、より良い病院施設のあり方を考えて実践していくことは、QOLの向上の面でも非常に重要であると考え。そうした流れを社会全体で促進していくためにも、このような活動を積極的に実施していくことが望ましい。

また教育的意義の面から見ると、本プロジェクトのような取り組みは、クリエイティブな活動が社会にもたらす効果を直接的に体感できる非常に有意義な機会であったと言える。参加した学生のいずれも、本プロジェクトに関わった医療関係者の思いや期待を真摯に受け止め、真剣な姿勢で制作に臨んでいた。完成した壁画を喜ぶ小児患者の姿を見て感じ入る学生もあり、デザインの役割とデザインを学ぶことの価値について、机上の論理に留まらない真の意味での理解を促すことができたように感じている。

5. おわりに

本活動は今後数年間にわたって継続実施される予定である。今後もプロジェクト初年度の取り組みを通じて得られた知見を踏まえてプロジェクト実施体制をより充実させ、社会貢献活動／教育活動としてのいっそうの成果創出に向けて尽力していきたい。

【付記】

本プロジェクトの参加学生を以下に記す。

天池 千里
宇留野 萌
門野 麻衣子

武部 美紀
林 稚菜
半田 瑞歩
馬場 彩加
前山 夏希
山本 里実
世一 桃佳
(五十音順)

【参考文献】

- ・ アートミーツケア学会（編）：病院のアート～医療現場の再生と未来、アートミーツケア学会、2014
- ・ 小川直茂、奥村和則：地域活性化に向けたデザイン支援、岐阜市立女子短期大学研究紀要第62輯、pp.133-136、2012
- ・ 小川直茂：短期大学における産官学連携事業実施にあたっての諸課題についての考察、岐阜市立女子短期大学研究紀要第64輯、pp.83-86、2015
- ・ 小川直茂、奥村和則、坂本牧葉：産学連携事業による「スポーツウェアブランド Razzoli・VI デザイン」の取り組み、岐阜市立女子短期大学研究紀要第65輯、pp.63-66、2015

(提出日 平成29年1月10日)